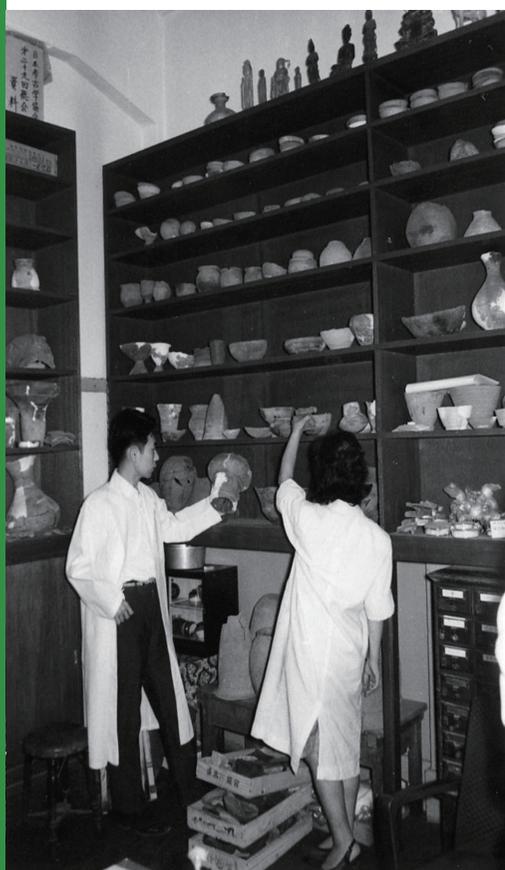




立正大学博物館
十五年のあゆみ

品川キャンパス展



ごあいさつ

今回の展覧会は、立正大学博物館が開館 15 周年を迎えたことを記念し、新たな一歩への節目とするべく企画されたものである。

博物館は、国立なら国、私立なら企業など、設立主体の特色を表す顔であるという。博物館を見学することで、その博物館を建てた主体の特色が、ヴィジュアルに理解できるというのである。

とすれば、大学博物館は、文字通り大学の顔ということになるが、大学博物館という存在が目されるようになったのは、そう古いことではない。

東京周辺の大学博物館が設立された時期をみると、東京大学総合研究博物館が平成 8 (1996) 年、早稲田大学會津八一記念博物館が平成 10 (1998) 年、駒澤大学禅文化歴史博物館が平成 14 (2002) 年、明治大学博物館が平成 16 (2004) 年、國學院大學博物館が平成 25 (2013) 年というように、それぞれ前史があるとはいえ、大学博物館としての自覚が芽生えてきたのが新世紀到来前後であることがわかる。

わが立正大学博物館も、平成 14 年で、偶然ではあるが駒澤大学禅文化歴史博物館と同じ年に開館している。同じ仏教系の大学として、類似した傾向が表出したのかもしれないが、私立大学のみならず国立大学もほぼ同時期に大学博物館を設立しているところをみれば、より広い目でみる必要があることを示している。

新世紀到来前後の大学は、教養部廃止に始まる大学改革が活発になるなかで、それぞれの大学の個性を重視する方向性を打ち出してきた。大学の個性が自覚されるようになると、それを外部に向けて発信することが求められるようになるが、大学博物館の設立もその一環である可能性が指摘できる。いわば大学のアイデンティティを象徴する施設として大学博物館は存在しているのである。

このように考えると、立正大学博物館が担う役割の大きさがあきらかになるが、そのことを自覚し、大学のあり方を考える機会に本展覧会がなれば、望外の喜びである。

平成 28 年 10 月

立正大学博物館長 時枝 務

ごあいさつ／目次／凡例

1. 歴代館長ごあいさつ	1
2. 開館までのあゆみ	4
3. 展示・教育普及	5
4. これまでの企画展・特別展	6
5. 所蔵資料の紹介	8
6. 博物館 15 周年の年表	12

凡 例

- (1) 本図録は、立正大学博物館 博物館開館 15 周年記念展のパンフレットとして作成しました。
- (2) 本図録の作成は時枝務(立正大学博物館長)の指示により、大塚美紗登(当館専門職員)が担当しました。
- (3) 本展示の開催にあたり、以下の方々・機関にご協力を賜りました。感謝申し上げます。

読売新聞社 立正大学大学史料編纂課

1. 歴代館長の挨拶

立正大学博物館の思い出

初代館長
坂詰 秀一名誉教授



立正大学博物館が開館 15 周年を迎え、その記念行事を開催するとの連絡を受けた。かつて、「立正大学博物館」開館の道程」（『立正考古通信』6 2002.5、『立正大生活半世紀』2006.3）について書いたことがあり、また、私が館長を勤めた期間の館行事などについては、館報『万吉だより』（1～3、2002～2004）の「巻頭言」に認めたので、ここで繰り返すことを避けたい。

立正大学に博物館が設置されるにいたった経過、開館当初のことについては上記の拙文に記述したが、いずれも忽卒の間の遊びであり、意を尽くすことなく擱筆した。よってそれらの補遺を含めながらの思い出としたい。

「立正に博物館があったらいいな」と終生にわたって望まれていたのは久保常晴先生（1907～1978）と丸子亘先生（1926～1986）であった。周知のようにお二人とも立正大学に学び教壇にたたれた。久保先生は、昭和 10 年代以降、史学科の標本室・考古学資料室を元に公開施設を、丸子先生は、博物館学を担当していたことから、実習の場として博物館の相当施設の設置を永く夢想されていた。お二人の生前にそれが適わなかったのは残念であった。

お二人の側で学んできた私にとっても博物館の設置は願望であった。学生時代に國學院大学・明治大学で眼にしていた博物館は、私にとって羨望であった。「何時か、立正に博物館」を、との願いは、吉田格先生（卒業生、1920～2006）が還暦を迎えられたのを記念して、自ら発掘された縄文時代の資料を立正大に寄贈して下さることになり、その受け入れを学長・理事長に具申したことに端を発した。

すでに、ネパールで発掘してきた釈迦関係の資料（ティラウラコット出土）、長年月にわたり多くの学生諸君と共に全国的に発掘してきた古代窯跡発掘資料など、考古学研究室と付属の資料室・収蔵庫には多量の発掘遺物があり、その公開が多くの研究者などから望まれていたからである。「博物館はともかく吉田コレクションは受け入れたい」と決定し、寄贈品の図録も完成したので次のステップを目差すことにした。

1999 年に入り、旧知の眞鍋孝志氏（ビジネス出版社社長・古鐘研究会会長、1930～2014）から、古稀を迎えるにあたり、膨大な鐘資料の活用について相談があった。「どこか仏教系の施設で活用できないか」とのご下問であった。何回かの相談の結果「立正大でどうだろうか」と言うことになった。当時、学長職であったことから、早速、理事長（田賀龍彦先生）と協議することになった。

受け入れには施設が必要である。その場所の決定は大変であった。既存の施設の転用しか考えられなかったからである。

紆余曲折、やっと旧教養部の自然科学実験棟が候補となり、多くの教職員の皆さんの協力によって施設が確保された。その間、眞鍋コレクション図録の作成ともども尽力してくれたのが上野恵司氏（1962～2005）であった。

2002年4月、待望の立正大学博物館の開設となり、上野氏が学芸員として着任した。眞鍋氏は、寄贈した梵鐘の調査研究の研究費を寄せられた（『立正大学仏教考古学奨励基金』）となった。『Buddhistic Archaeology』1・2、2001～2005）。

上野氏は眞鍋基金により「中国・韓国・タイ」に渡り梵鐘の調査を行ったが、その成果をまとめることなく急逝されたのは誠に残念であった。

立正大学の博物館の所蔵資料は、大学に学んだ多くの考古学専攻生が発掘で流した汗の結晶と中村端隆先生が釈迦の遺跡発掘に邁進した成果などに加えて、吉田・眞鍋コレクション、そして久保先生の樺太資料がユニークな存在として光輝している。

立正の博物館は「まさに大学の博物館ですね」との風聞を耳にするようになった。15年の歳月を経て、新たな方向を樹立して欲しい、と願いながら思い出すままに回想録を記した。

平成 28 年 10 月 13 日

各国の梵鐘など
考古資料を展示

立正大学考古学研究室が
長年にわたって発掘・収集
を続けてきた膨大な考古資
料を公開する「立正大学博
物館」Ⅱ写真Ⅱが先月、オ
ープンした。博物館は、武
蔵野の面影を残す同大熊谷
キャンパス（埼玉真熊谷市）
にある。実験棟として使わ
れていた延べ三百七十平方
メートルほどの建物を改装したも
のだが、転用に伴う不自
然さを全く感じさせない。

扉を開けて真っ先に目を
引くのが、階段わきなどに
と置かれた大型の梵鐘。
館長の坂詰秀一・立正大教
授と親交の深い古鐘研究会
会長、眞鍋孝志氏から寄贈
を受けた二百数十点の中
の一部で、展示室にはアジア
各地の大小の梵鐘がずらり
と並んでいる。坂詰館長が
「インターネットでは、オ
リエントナル・ベル・ミュー
ジウムという名前にしよう
と思っています」と自信を

見せるのもうなずける、全
国屈指のコレクションだ。
一階の第一展示室には、
これらの梵鐘のほか、同研
究室が一九五八年から八〇
年にかけて行った全国各地
の古代窯跡から出土した須
恵器や瓦、硯などが所狭
に極めて貴重な。

ネパール・ティラウラコ
ット遺跡での発掘成果も見
逃さない。一九六七～七七
年の調査で、釈迦が出家し
たカピラ城跡の最有力候補
地として注目されている
が、多彩な出土資料もさる
ことながら、日丸を胸に
張り付けたユニホームのほ
か当時の発掘機材一式が展
示されており、発掘技術史
的な視点からも興味深い。

自前の発掘資料から寄贈
コレクションまで多岐にわ
たる展示品は総計約二千
点。坂詰館長は「一年一回の
ペースで特別展も開催し
、多くの方々に親しんでもら
いたい」と話している。

開館時間10～16時。日、
火、土曜休館。無料。

立正大博物館
オープン



2002年5月1日（水）『夕刊讀賣新聞』

博物館開館 15 周年にあたって

博物館担当副学長・2代目館長
池上 悟



平成 14 年に大学開校 130 周年記念事業として熊谷校地に開館した立正大学博物館は、本年で 15 周年を迎えました。これは学長をつとめられ、初代館長に就任された坂詰秀一名誉教授のご尽力によるところであります。

所蔵資料は、考古学研究室の初代教授をつとめられた故久保常晴博士収集の樺太出土資料、同窓の吉田格氏から寄贈された縄文文化資料である“吉田格コレクション”、考古学研究室の長年にわたる全国各地の調査により収集された考古資料が主体でありました。その後、梵鐘研究家の真鍋孝志氏から寄贈された世界各地の鐘資料である“撫石庵コレクション”、長らく非常勤講師をつとめられた三宅敏之氏寄贈の経塚関連資料、縄文研究で著名な江坂輝弥氏寄贈の考古関連資料などが加わっております。

鐘を主体的に所蔵する博物館は少なく、Japanese Bell Museum として梵鐘研究を博物館として進めてきたところでもあります。

熊谷校地の環境は、博物館開館当時とは大きく異なり学生数も減少しております。しかし、2 代目館長として 10 年つとめたところでは、立正大学にとって不可欠な熊谷の地の振興に、博物館は積極的に関わっていかなければならないと考えております。

平成 28 年 10 月 13 日



立正大学博物館外観



館内エントランス

2. 開館までのあゆみ

立正大学創立 130 周年記念として開設された立正大学博物館は、昭和 7（1932）年に大崎キャンパス（現 品川キャンパス）に設置された考古学標本室、昭和 53（1978）年に熊谷キャンパスに設置された考古学陳列室を基にして、品川キャンパスの考古学研究室の所蔵品を加え構成されています。

1. 開館までの経緯

昭和 7（1932）年、本田茂一・桃井秀治・矢追隆家と久保常晴氏らによって大崎キャンパスに考古学標本室が開設しました。当時の考古学標本室には、久ヶ原遺跡出土の弥生土器をはじめ、原田淑人寄贈の俑・中国銭・玉斧・鏡、石田茂作寄贈の古瓦・瓦経のほか、埼玉県川田谷古墳出土品などが陳列されていました。しかし、その後の太平洋戦争の激化によって考古学標本室は機能麻痺となり、数多くの貴重な資料が散逸しました。

戦後、考古学資料室は再生し、久保常晴教授・坂詰秀一教授のもとで実施された数多くの発掘調査の成果を反映した資料が集積されました。

昭和 42（1967）年、教養部が発足し、熊谷キャンパスが完成しました。10 万坪という広大な土地の下に遺跡の存在が確認されました。その遺跡は「立正大学熊谷校地内遺跡」と名付けられ、遺跡調査室を新たに設置し発掘作業が実施されました。

その後、出土品を学内外に公開するため昭和 53（1978）年 4 月に、熊谷キャンパスに考古学陳列室が設置され、熊谷校地内遺跡出土品やネパールティラウラコット遺跡出土品が陳列されました。

2. 立正大学博物館の開館

昭和 7 年に開設された考古学標本室、昭和 53 年に熊谷キャンパスに設けられた考古学陳列室ですが、常時公開されることはありませんでした。

そこで立正大学創立以来、学内の各所に分散所蔵されていた諸資（史）料を一括保管し、公開することを目的とし平成 14（2002）年 4 月 1 日、熊谷キャンパスに立正大学博物館が開設しました。



大崎（品川）の考古学標本室 1960 年代



博物館開館当時の様子

3. 展示・教育普及

1. 常設展示

(1) 第1展示室

眞鍋孝志氏(日本古鐘研究会会長)より寄贈されたアジア諸地域の梵音具を中心とする撫石庵コレクションおよび、立正大学考古学研究室によって発掘された古代窯業の資料を中心に展示しています。

また、熊谷キャンパスにおける施設の新築などに際して、遺跡の発掘調査を実施しており、その折に発掘された資料を展示しています。



第1展示室

(2) 第2展示室

吉田格(立正大学専門部地歴科・昭和16(1941)年卒)寄贈のコレクションおよび、久保常晴教授寄贈の樺太出土資料、ネパール・ティラウラコット出土資料群などを展示しています。



第2展示室

2. 教育普及

教育・研究の活動の一環として、博物館学芸員課程講座の館務実習の場として提供しています。

毎年1週間程度の実習を行い、10名～20名の学生たちを受け入れています。

資料の写真撮影や梱包の仕方、土器の接合・拓本、資料台帳カードの作成などのほかに、地球環境科学部の教員による自然誌実習や刀剣の取り扱い実習などを行っています。



館務実習の様子

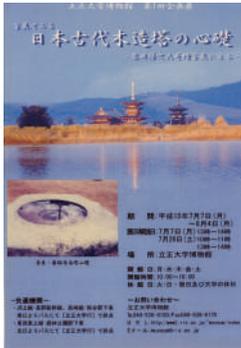
3. 刊行物

博物館では、『博物館案内』・『立正大学博物館要説』のほかに、年1回の『立正大学博物館年報』『館蔵資料「基礎文献」叢刊』や年2回発行の館報『万吉だより』の発行を行っています。

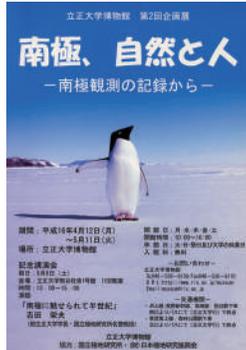
4. これまでの企画展・特別展

立正大学博物館では年2回、企画展・特別展を開催しています。また各学部の研究成果の場としての提供も行っています。

【企画展】



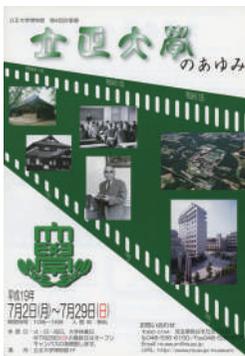
第1回企画展



第2回企画展



第3回企画展



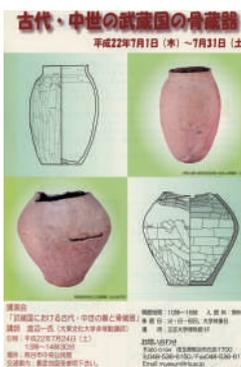
第4回企画展



第5回企画展



第6回企画展



第7回企画展



第8回企画展



第9回企画展

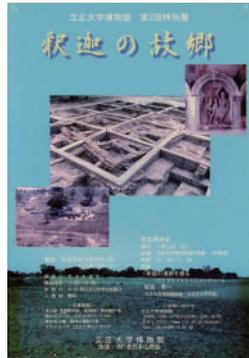


第10回企画展

【特別展】



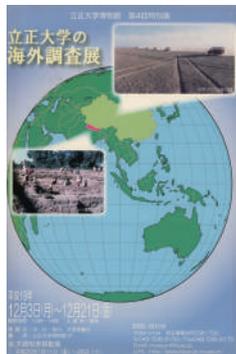
第1回特別展



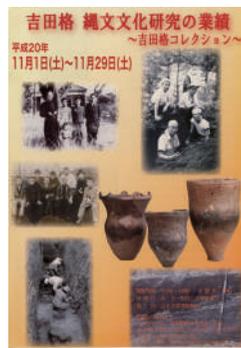
第2回特別展



第3回特別展



第4回特別展



第5回特別展



第6回特別展



第7回特別展



第8回特別展



第9回特別展



第10回特別展

5. 所蔵資料の紹介

久保常晴博士寄贈 樺太出土資料

久保常晴博士寄贈の樺太出土資料は、同氏が1930年代に樺太の地を調査した際に収集した資料です。

調査は、旧亜庭湾岸の留多加川流域、鈴谷川流域、両者の中間で湾に直面する江ノ浦の3地域を中心に行われました。

樺太出土の資料は現在、日本各地に収蔵されていますが、その1つとして立正大学博物館所蔵品の存在が知られています。



樺太出土資料 (1)



樺太出土資料 (2)

吉田格氏コレクション

吉田格氏寄贈のコレクションです。吉田氏は縄文時代研究の学者として著名であり、とくに縄文時代早期の花輪台式、後期の称名寺式は吉田氏によって設定された標準型式資料として学界に周知されています。

関東地方でもっとも早く発掘された旧石器時代後期の遺跡（熊ノ郷・殿ヶ谷戸・西之台Bなど）・縄文時代各時期の遺跡群からの出土資料、とくに早期の花輪台式・子母口式、後期の称名寺式・堀之内式、晩期の安行各式土器は、多数の土製耳飾り及び諸貝塚出土の骨角製品とともに広く知られています。とくに称名寺貝塚出土の土器・石器・骨角器及び骨角器原料（鹿角）は縄文時代の研究上、きわめて重要な資料です。



称名寺貝塚出土骨角器



吉田格コレクション

撫石庵コレクション

眞鍋孝志氏（日本古鐘研究会会長）寄贈のアジア諸地域の梵音具を中心とする撫石庵コレクションです。

日本をはじめ朝鮮半島・中国・タイ・ミャンマー・スリランカなどアジア各地の梵音具（鐘・鐸）のほか、金銅釈迦如来立像などが含まれています。

アジアの梵音具の資料として稀有のコレクションであり、中国の鐘、伝タイの銅鼓を加えた資料は注目されています。

とくに、伝奈良県橿原市出土の古代の梵鐘はわが国の初現期の梵鐘として十指に入るもので、きわめて貴重な資料です。



伝奈良県橿原市出土鐘（右 復元）



撫石庵コレクション

発掘出土品（旧石器～古墳時代）

旧石器～古墳時代にわたる資料。

旧石器時代では、日本の旧石器時代の代表的遺跡として知られている北海道白滝遺跡の出土品と本学が発掘した北海道報徳遺跡、神奈川県朝日遺跡の出土品です。とくに朝日遺跡は、獅子文六『箱根山』に登場する遺跡として有名ですが、神奈川県下で最初に発掘された旧石器時代の遺跡としても知られています。

縄文時代では、埼玉県石神貝塚の出土品などがあり、縄文時代後～晩期の貝塚群の一括資料です。



朝日遺跡出土品



石神貝塚出土品

弥生時代では、東京都久ヶ原遺跡出土の弥生式土器がある。この遺跡から昭和10年代に出土したものと古くから考古学界に知られています。

古墳時代の資料として、埼玉県野原古墳群の発掘調査資料、耳飾、直刀、鉄鏃、須恵器などを展示しています。

このほかに、弥生時代の伝 福岡県須玖出土の銅戈などが展示されています。



野原古墳群調査風景



野原古墳群出土品

発掘出土品（古代～近世）

古代では、千葉県九十九坊廃寺・同長熊廃寺跡の出土瓦資料があります。とくに、長熊廃寺跡は、本学が昭和26年から28年にかけて発掘した遺跡として知られています。土師器の火葬骨蔵器は、主として神奈川県下の出土品です。

中世では、板碑・骨蔵器、近世では、越智松平家斉厚夫人の石製墓誌などが収蔵されています。



越智松平家斉厚夫人の石製墓誌

古代窯跡

昭和30～50年代にかけて立正大学考古学研究室が実施した「古代窯業の考古学的研究」によって発掘された資料です。

青森県に存在する北限の前田野目遺跡、山形県の荒沢・町沢田遺跡、群馬県の金山瓦窯跡、上小友窯跡、長野県の宮洞・若宮・御牧ノ上・八重原窯跡、埼玉県の亀ノ原・新沼・山田・宮ノ前・虫草山などの窯跡、広島県の青水窯跡、福岡県の平田窯跡などからの出土品で、いずれも古代窯業生産の実態、土器の編年、瓦磚の供給問題についての貴重な資料として知られています。



武蔵新久窯跡出土資料



熊谷校地内出土資料



武蔵新久窯跡発掘風景

ネパール・ティラウラコット出土資料

1967～1977年にかけて、立正大学がネパール王国に派遣した発掘調査団によって発掘された資料です。

ティラウラコット遺跡は、釈迦出家の故城カピラ城跡の有力な比定遺跡として世界の学界に知られています。この地を10年間にわたって発掘調査した結果、カピラ城跡の最有力遺跡として注目されています。東西約400m、南北約480mの方形の城跡内に7つの遺丘が存在し、このうちの2ヶ所を発掘して得られた資料です。

発掘の報告書『TILaura KOT』I・II（1978・2000）は、立正大学が出版しました。

熊谷校地内出土資料

昭和53年以降に遺跡調査室を設けて、校地内遺跡の調査を継続してきました。その折、貴重な資料が出土しています。

とくに、縄文時代早期の土器群の出土は、埼玉県内の土器文化の起源を探るうえできわめて貴重な資料として注目されています。また、古墳時代後期～平安時代にかけての集落跡、江戸時代の遺跡も発掘され、教育の場、研究の資料として活用されています。



ティラウラコット出土資料

6. 博物館 15 周年の年表

和 暦	西 暦	博物館のできごと	立正大学のうごき
天正 8	1580		下総国飯高郷（千葉県匝瑳市飯高）に日蓮宗僧侶の教育・研究機関として飯高檀林を創設する
明治 8	1875		飯高檀林廃止
大正 13	1924		大学令による立正大学を設立
昭和 7	1932	品川校地に考古学標本室開設	
24	1949		学校教育法により新制立正大学となる
42	1967	品川校地に考古学陳列室開設	教養部開設（熊谷）
47	1972		立正大学開校100周年
53	1978	熊谷校地に考古学陳列室開設	
56	1981		法学部設置（熊谷）
57	1982		立正大学開校110周年
平成 4	1992		立正大学開校120周年
7	1995		教養部廃止（熊谷）
8	1996		社会福祉学部設置（熊谷）
10	1998		地球環境科学部設置（熊谷）
14	2002	熊谷校地に立正大学博物館を開館	立正大学開校130周年
15	2003	第1回企画展「写真で見る日本古代木造塔の心礎 -岩井隆次氏寄贈写真による-」開催	
		第1回特別展「立正大学が発掘した埼玉の古代竊跡」開催	
16	2004	第2回企画展「南極、自然と人-南極観測の記録から-」開催 第2回特別展「釈迦の故郷」開催	
18	2006	第3回特別企画展「江戸狩野とその世界～作品と墓所～」開催	
19	2007	第4回企画展「立正大学のあゆみ」開催 第4回特別展「立正大学の海外調査」開催	
20	2008	立正大学博物館開館5周年 第5回企画展「梵鐘-撫石庵コレクションを中心に-」開催 第5回特別展「吉田格 縄文文化研究の業績-吉田格コレクション-」開催	
21	2009	第6回企画展「立正大学熊谷キャンパスの遺跡 -熊谷校地内遺跡調査 30年のあゆみ-」開催 第6回特別展「題目板碑の世界」開催	
22	2010	第7回企画展「古代・中世の武蔵国の骨蔵器」開催 第7回特別展「群集墳の時代～野原古墳群～」開催	
23	2011	第8回企画展「石器のいろは～収蔵資料の紹介～」開催	
24	2012	立正大学博物館開館10周年	立正大学開校140周年
25	2013	第8回特別展「泥塔と瓦経」開催	
26	2014	第9回企画展「立正大学のあゆみⅡ-軌跡と躍進-」開催 第9回特別展「近世の墓石と墓誌を探る」開催	
27	2015	第10回企画展「立正大学の海外佛跡調査-ティラウラ・コットからカラ・テベへ-」開催 第10回特別展「経塚の諸相」開催	
28	2016	立正大学博物館開館15周年	

品川キャンパス展

「立正大学博物館 15 年のあゆみ」

編集・発行 立正大学博物館

発行日 平成 28 年 10 月 13 日

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TELL : 048-536-6150/FAX : 048-536-6170

Email : museum@ris.ac.jp

URL:<http://www.ris.ac.jp/museum/>